

1 自己評価

I 評価結果

(別紙参照)

II 分析・改善策

- (1) 倉敷天城中学校と倉敷天城高等学校が有機的に協力し、充実した教育活動のできる学校運営を行う。
- ・中高合同で中学3年生の進路検討会を行い、生徒個別に普通科・理数科への適性等を検討し、保護者懇談でアドバイスをを行った。
 - ・各学年3回の情報提供の場を設けることができた。保護者アンケート「学校は進路実現に向けた支援と情報提供をしている」の結果は目標値85%に対して83.3%であり、昨年より向上した。
 - ・高校教務課との連携では、コロナ禍の中で高校授業の直接参観はできなかったが、オンデマンド配信によって実施した。生徒は理数科と普通科の特徴を理解した上で、適切に進路選択ができた。また、進路課との連携により天城高校への進学に向けた適切な情報を生徒・保護者に提供でき、高校での生活や学習に、より具体的なイメージをする機会を持つことができた。
- (2) 開かれた学校づくりを推進し、適切な情報発信を行うとともに、地域と連携することで教育活動を充実させる。
- ・第1回のオープンスクールは定員120組の公開授業を3回に分けて実施し、参加は310組(定員の86%)だった。第2回オープンスクールは生徒会生徒による学校紹介を行い、6年生は79組(定員の40%)、5年生は227組(定員の57%)の参加だった。第2回オープンスクールと入試要項説明会は、塾等を含めて広報活動、情報発信を十分にしておこなって参加者増を図る必要がある。
 - ・学校行事、学年、部活動などは、新型コロナウイルス感染症の影響で、中止・縮小されたものが多いが、東雲祭(学園祭)の縦割りブロック復活など、タイムリーなブログアップを行う等、ホームページを通じた情報発信の充実に努め、情報発信数を昨年よりも増加させた。
 - ・近隣地域のボランティア活動等への参加ができなかった。
- (3) 本校生徒に求められる基礎学力とこれからの時代に求められる学力をあわせて身に付けさせ、各生徒にふさわしい進路実現の基礎を培う。
- ・課題研究発表会は新型コロナウイルスの対策のため、昨年度と同様に、人数制限やリモートを用いた実施だったが、生徒には有意義な発表会になったと思われる。また、横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校との課題研究交流会はできなかったが、リモートでのディスカッション等を行った。各種課題研究のコンテスト等への参加はのべ22件あり、筑波大学主催の「科学の芽賞」で最優秀の「科学の芽賞」や「努力賞」を受賞した。
 - ・学習計画表の点検や、学習時間と試験の成績を分析する等により、個別指導や全体指導を行うことにより、学習時間の確保に努めた。
 - ・教科指導で、理科の発展学習、数学・英語の基礎学習など、始業前、放課後に学習会を行った。
- (4) 異年齢の集団、多様性のある集団を活かし、豊かで多様な体験等を通じて、思春期にふさわしい人間的成長を遂げさせる。
- ・天城小学校との直接交流は、中止となったが、代替として「薬の正しい使い方」の動画を中高保健委員会で作成し、天城小学校へ贈った。ライフスキル教育には、リモートで各学年2回実施した。「周りへの思いやりや自己受容の高まり」が感じられる生徒の感想が多く見られた。ピアサポート活動は5回実施した。生きる力を育む教育の主軸として、次年度も充実させていく。

- ・教育相談では、ケース会議による情報共有、スクールカウンセラー相談などを行った。相談希望件数も増加傾向にあり、多様な生徒・保護者の悩みに対応するため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの協力を仰ぎながら、可能な限りの手立てをとっている。
 - ・AMAKI 学で、平和、人権、職場体験など幅広い人間形成に必要な学習を進めた。
- (5) 適切な教育環境の整備・管理に努めるとともに、心身ともに健康な生徒の育成のための環境づくり、指導に努める。
- ・各授業において、Google サービスを活用して小テストやスライド作成、ファイル共有などを積極的に行い、生徒の一人一台端末を主体的に活用しながら探究する「STAGE3」に相当する活用ができた。また、学力保障のためのオンデマンド配信やリモート授業も定着した。
 - ・自転車の接触事故等が 13 件発生した。交通査察（6 回実施）だけでなく、全校生徒への交通マナー向上のための啓発動画を来年度に向けて作成中である。今後とも、交通指導や交通委員中高合同交通安全教室、更に家庭の協力も得ながら今後も積極的に指導していきたい。
 - ・教育相談、デイリーライフ、日常の学校生活を通して生徒の心身の状態を把握し、生徒課会議や職員会議、職員朝礼を通して、教員間での情報交換を密に行うことで、学校としてまとまりのある指導・支援を行った。

2 学校関係者評価委員名

大倉 尚志（岡山大学大学院教育学研究科教授）	上村 勝人（学校歯科医）
山田 耕三（ベネッセコーポレーション）	廣畑 香里（元PTA役員）
寺地 治見（PTA役員）	

3 学校関係者評価

- ・英語の授業ではネイティブの先生による店舗の良い授業だが生徒はよくついていっている。また、クロームブックの利用を各教員は試行錯誤しながらよく取り組んでいる。
- ・学校のホームページ情報は固定されやすいので、こまめな更新を心掛けてほしい。
- ・天城中学にあった部活動を考えていくことが大切である。地域との連携は大切であり、天城の地域には人材がいるのではないかと。教員数に対して部活動数が多く 1 人の教員への負担感が大きい。削減していくためには時間をかけて話し合う必要がある。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- (1) 生徒一人一台端末を有効に活用し、主体的・対話的で深い学びに向かう授業を深化させ、家庭学習を質・量ともに充実させることにより、質の高い学力を身に付けさせるとともに、新学習指導要領を着実に実施する。
- (2) 将来像を検討する中で、中高の更なる連携等を進め、制服の改定に向けた研究を行う。
- (3) 高校での諸教育活動についての情報を共有するとともに、必要な役割分担を行い、教育活動の充実を図るとともに、校内外に丁寧で効果的な情報発信を行う。
- (4) 学校の諸教育活動を組織として継承する中で、評価・点検を的確に行い、必要な見直しと充実を図るとともに、確立された部活動活動方針のもと、運動部活動指導員や産業医と連携したり、ICTを活用したりすることで働き方改革を進め、中高の部活動の在り方を検討し、ゆとりと意欲の更なる創造を図り、教育活動の質を高める。
- (5) 特別活動、課外活動、校外の活動などに、主体的に取り組ませることを通して、適切な対人関係の能力やたくましさを育成する。
- (6) きめ細かいクラス運営や各種相談を通じて、的確に生徒理解を図るとともに、生徒の自己有用感を涵養する。